

## 妊娠に合併する虫垂炎～19 例の経験から～

加藤大樹 浅野正太、西川茂樹、小寺知揮、松木理薫子、小野佐代子、柴田貴司、  
徳田妃里、白川友香、森本規之、中後聡、大石哲也、小辻文和

(社会医療法人 愛仁会高槻病院 産婦人科)

### 目的

妊娠中の虫垂炎の診断の遅れは母児の予後を悪化させ、迅速な手術を要す。一方、このことを恐れる余り不必要な手術が多いことも事実である。本研究では、妊娠中の虫垂炎を疑う際の“よりの確な手術基準”を模索する目的で、19 症例で“手術”もしくは“経過観察”を選択した背景を検討した。

### 方法

妊娠中に虫垂炎を疑った 19 例を対象に、手術決定の要因(臨床所見、画像所見、血液検査所見)、決定に要した時間、術後病理所見を後方視的に解析した。

### 結果

1. 初診時に右下腹部痛かつ画像検査での虫垂炎所見を認めた 7 例の臨床経過  
4 例は直ちに手術を行った。残る 3 例は一旦保存的治療を選択したものの、その翌日に症状・所見が増悪し手術を行った。7 例とも虫垂炎であった。
2. 初診時に右下腹部痛もしくは画像検査での虫垂炎所見のいずれか 1 つを認めた 12 例の臨床経過  
初診時には保存的治療を選択した。  
[1] 3 例は翌日に腹部所見と CRP の増悪を認め手術を行った。虫垂炎であった。  
[2] 6 例は翌日に腹部所見は改善したものの CRP の増悪を認めた。  
(1) 3 例は CRP の急上昇(平均値 2.43→13.9)を認め手術を行い虫垂炎であった。  
(2) 2 例は CRP が軽度上昇(平均値 1.53→3.89)に留まり、保存的治療を継続した。手術を施行せず退院したものの、2 例とも後日虫垂炎が再燃し手術を行った。  
(3) 1 例は CRP の上昇が僅か(1.29→2.24)であったが手術を行った。虫垂炎は認めず誤診であった。  
[3] 3 例は腹部所見が改善し CRP は正常であったため、保存的治療を継続した。手術を施行せず退院し、再燃しなかった。
3. 全 19 例において母体の予後は良好であった。児の予後は 18 例で良好であり、1 例で水頭症と発達遅滞を認めている。

### 結論

- (1) 腹部所見と画像所見が明らかであれば直ちに手術を行う。(2) 保存的治療を選択する場合、翌日に腹部所見の持続もしくは CRP 急上昇を認めれば、手術が必要である。(3) 経過観察中に腹部所見が改善し、かつ CRP 上昇が軽度に留まれば、保存的治療が可能である。但し、CRP 上昇例は再燃を念頭に置くべきである。